

天蚕飼育による地域環境の活用方向

佐藤 了・宮武 恭一・佐藤百合香

(東北農業試験場)

'Yamamayu' Breeding: An Approach to the Effective Use of Regional Environments

Satoru SATO, Kyoichi MIYATAKE and Yurika SATO

(Tohoku National Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

天蚕飼育は、近年、中山間地帯の地域環境を活用できる作目として注目されているが、それが地域産品として定着していく方向や条件に検討を加えた研究はまだ見あたらない。そこで小論では、天蚕振興の発展段階を措定しつつ、その発展段階が自然環境と社会環境などの地域環境の活用と深く関わり、いくつかの類型が生じていることを示す。その上で地域環境の活用方向を検討する。なお小論は、「新需要創出のための生物機能の開発・利用技術の開発に関する総合研究」(バイオルネッサンス計画)の分担課題「地域複合利用技術の総合的評価」(平成3～5年度)研究結果の一部である。

2 対象と視点

(1) 天蚕繭生産の動向

「蚕業に関する参考統計」(農林水産省農蚕園芸局蚕業課、各年)によると、わが国の天蚕繭の生産は、1991年現在、生産者367戸、収穫量約5tとそれぞれ5年前の2.5倍、5.6倍と急成長しているが、全国合計で家蚕大規模農家1戸の生産量程度で、1戸当たりによれば13.6kgときわめて零細で、いわば希少な特産品としての特徴を示す。しかも中心的産地は、1991年の収穫量でみても関東地域が35.6%、九州地域が28.9%、中四国地域が15.3%と関東以西であり、東北地域は6.8%と低く、いわば新興産地の一つである。

各県の振興方針等によると、天蚕導入のねらいは、自然環境を利用した天蚕振興と天蚕糸を使った山村の特産品づくりの2点に集約できる。こうした方針の下で、中山間地域を中心に点的に天蚕飼育が普及しつつある。

(2) 視点と方法

天蚕振興における技術評価には、少なくとも次の2つの視点が必要である。まず第1に、産地化には繭や糸という中間生産物づくりの段階から最終商品づくりの段階まであるため、生産プロセスが進むほど高次の発展段階にあると考えられるので、それに応じた評価基準を明らかにする必要がある。第2に、似たような発展段階にある場合でも自然環境や社会環境などの地域環境の活用の仕方によりいくつかの類型が生まれるため、それに応じた評価基準とする必要がある。

このような視点を具体化するには、①まずいくつかの産

地について概要調査を行い、視点に関係する要素を抽出する、②典型産地を選び、諸要素の関連等についてボーリング調査・分析を行い、評価基準を設定する、③②で得た基準を他産地にも適用し、実証するという3段階が少なくとも必要である。小論は①の成果の一部である。

3 天蚕振興の発展段階と類型—産地事例の検討から—

図には、上述の2視点から住田町、衣川町、一戸町(以上岩手県)、山形県白鷹町、滋賀県浅井町の調査結果を示した。その特徴を箇条書きすると以下の通りである。

第1は、天蚕に取り組むには飼料樹と天蚕生育などに適する自然環境が必要である。わが国では、飼料樹であるクヌギやコナラなどは、高標高などで寒害を受けない限り広く落葉樹林帯に自生でき、天蚕の生育も、日照がよく飼育管理の便がある適湿な土地であれば、広い適性がある¹⁾。

第2は、その自然環境の活用の仕方に地域差・地域個性があり、それに応じた技術確立が必要である。たとえば、通常平坦部では連棟型ハウスをネットで覆い放飼するが、急峻な傾斜地の多い住田町では、当初からシイタケ植菌原木のクヌギ幼木を有効利用する観点から天蚕飼育を発想し、飼養樹単位にネットをかけて飼養するため、作業ならびに防除技術に違いが生じる。

第3は、社会環境要素のうち家蚕経験による飼育技術は多くの地域で蓄積があるが(たとえば後述の岩手県での調査結果では家蚕経験飼育者が70%)、繰糸・紡ぎ、織布などの技術の蓄積やその圏域の観光資源の地域差が大きく、多様な類型や発展段階を生む基礎条件となっている。

事例を念頭に置くと、発展段階と類型は、およそ次のように想定できる。まず天蚕繭の生産と繰糸を目指す住田町を典型とする段階である。この段階は新興産地として避けられないが、飼養や繰糸技術の確立とともに販路開発、繭価変動の影響など厳しい問題に直面することになる。

次は製品づくりを目指す段階である。これには平泉や古戦場など観光資源が豊富で観光客に対する土産品づくりを目指す衣川町の類型と、観光客をさほどあてにできず、ネクタイや財布など個人の趣味的取り組みを活かした小物づくりから限定販売を目指す一戸町の類型がある(前者の特徴は同じ系譜の浅井町を事例に言及する)。後者は、必ずしも観光資源が豊富でない農村で取り得る一つの類型として注目される。それは、昭和62年頃、9名の女性グループ

発展段階	自然環境		社会環境				当該地域の分布状況 (重点) 乏 ← 観光資源 → 豊
	飼料樹	天蚕生産	技術の蓄積			観光資源豊か	
			飼育	繰糸・紡	織物		
↓ 天蚕繭づくり ↑ 繰糸・つむぎ ↑ 製品づくり ↓ 市場開拓	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	— — ○ つむぎ ○ つむぎ ○ つむぎ繰糸	— — — ○ かすり ○ ちりめん	— ○ — — ○	住田町 (繭・糸) 衣川町 (土産品開発) 一戸町 (趣味製品) 白鷹町 (お召し) 浅井町 (家紋・打敷・能装束等)

図1 天蚕振興の発展段階と類型

- 注. 1) 住田町, 衣川町, 一戸町, 白鷹町, 浅井町の調査から作成。
 2) 発展段階の矢印は, 実践が発展方向を, 破線がそれに伴う課題の発生を示す。
 3) 該当するところに○, 非該当に—を付した。

が天蚕を利用した趣味製品づくりを目指して家蚕くず繭のつむぎ技術を地域の老女から伝承したことに始まる。その後天蚕繭のつむぎ技術にも取り組み, 現在, 趣味や生活密着型の取り組みの中から開発した製品が売れてこずかい稼ぎになっているが, 天蚕繭の精錬法や繰糸法がまだ十分にマスターできず, 製品開発上の悩みもある。

ある程度製品づくりができて, その市場は自然に広がる。そこで最後に新たな市場を意図的に開拓して天蚕製品の定着を目指す段階が想定できる。これには, 現在のところ家蚕繭の繰糸・つむぎや織物の地場産業を有し, 天蚕にその活用を図ってきたところが該当する。そのうち白鷹町では, 観光地から遠いこともあって, 総天蚕糸の豪華な訪問着を作り, 大手デパートとの提携を模索中である。浅井町では, 観光資源が豊富で京都に近いこともあり, ネクタイ, 財布などの小物のほか, 家紋・打敷等の仏具用品や能装束などを開発し, 立地を活かす方向を追求している。

しかし, これらの先進産地でもその製品の魅力が販売に結びつかないところに悩みと課題がある。需要構造全体を明らかにするには資料的制約が大きい, 事例調査結果から判断する限り天蚕生産量の伸びに比べ需要の伸びは鈍い。

4 新興産地における地域環境の活用方向

天蚕の需要の伸び悩みから, 東北地域では新興産地といえども地場加工体制を強めて需要を喚起しつつ産地形成していく必要が強まっている。91年11月岩手県天蚕飼育農家に実施したアンケートによると(回答者は29名うち女性6名, 回答率64%で60代中心の中高齢者層が主体であり, 天蚕飼育以外には農業, 林業が多く, 勤めている人は少ない), 技術上の悩みとして鳥害・鼠害と天蚕の病気をあげ, 加え

て繰糸技術習得の希望なども示している。同時に農協や役場への要望としては「販売先の確保と開拓」(28%)が最も強い。ここには, 新たな需要に結びつく製品開発体制を早急に作り上げながら, 同時に初歩的な技術習得の課題にも取り組む必要が示唆されており, 新興産地としての悩みが現れているとも言える。

その打開方向は次の二つに見い出される。一つは, 観光資源と結び付け, 市町村あるいはさらに広い圏域に生産だけでなく, 製品化そして販売にいたるまで一貫した体制づくりを進める方向である。それには地域特産品という性格から, たとえば天蚕に焦点を当てた観光施設などを設置して地域特産のみやげ品とする方策などが有力となる。二つは, 観光と結びつけられない場合は, 一戸町の例に示したように趣味の織物開発の方向が考えられる。上述したアンケートによると, 天蚕部門導入の目的は, 収入を増やすが41%, こずかい稼ぎや趣味が40%とほぼ拮抗し, 将来は「経営拡大」が28%, 「現規模で試験的」が38%, 「趣味的」が14%と, 経営収益目的もあるが, 試験的趣味的目的がより多いことにも注目し, それを活かすきめ細かな行政支援の必要があると考えられる。

また天蚕飼育だけでなく製品化と販売の「川下」まで一貫した研究支援の必要性はますます大きくなっており, それを地域の実践者を中心とする主体環境づくりと結び付けつつ進めることが緊要の課題と考えられる。

引用文献

- 1) 赤井 弘, 栗林茂治編. 天蚕. サイエンスハウス
P. 93-99.